

I

問1 求める力は円筒と小物体 A と B にはたらく重力の合力につり合うので

$$\text{力の向き: } \underline{\text{鉛直上向き}}, \quad \text{大きさ: } \underline{(M + 2m)g}$$

問2 点 O に対して小物体 A と B は点対称に動くので, 点 O に対する B の相対速度は $-\vec{v}_{OA}$ であるから

$$\vec{v}_B = \underline{\vec{v}_O - \vec{v}_{OA}}$$

速さ $|\vec{v}_{OA}|$ は円筒の回転の速さであり, 円筒はすべらず回転しているので点 O の速さに一致する。

$$\therefore \underline{|\vec{v}_{OA}| = |\vec{v}_O|}$$

問3 小物体 A が最も低い位置にあるとき, $\vec{v}_{OA} = -\vec{v}_O$ であるから

$$\vec{v}_A = \vec{v}_{OA} + \vec{v}_O = 0$$

となり, 速さが最小である。一方, 小物体 A が最も高い位置にあるとき, $\vec{v}_{OA} = \vec{v}_O$ であるから

$$\vec{v}_A = \vec{v}_{OA} + \vec{v}_O = 2\vec{v}_O$$

となり, 速さが最大の $2|\vec{v}_O|$ となる。よって, 運動エネルギーは

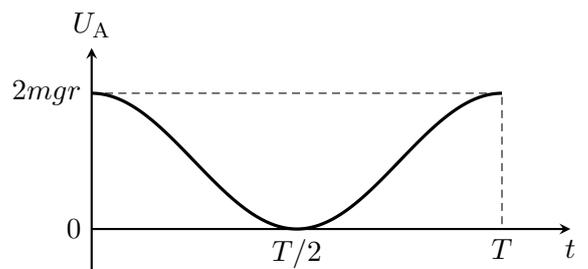
$$\text{最小値: } \underline{0}, \quad \text{最大値: } \underline{\frac{1}{2}m(2|\vec{v}_O|)^2 = 2m|\vec{v}_O|^2}$$

問4 時間 T の間に円筒が水平に距離 $2\pi r$ 進むから

$$T = \frac{2\pi r}{\underline{|\vec{v}_O|}}$$

問5 点 O から見た小物体 A と B の鉛直運動は周期 T , 角振動数 $\omega = \frac{2\pi}{T} = \frac{|\vec{v}_O|}{r}$ の単振動となる。小物体 A と B の机を基準とした鉛直変位をそれぞれ y_A, y_B とすると,

$$\begin{aligned} & \begin{cases} y_A - r = r \cos \omega t \\ y_B - r = -r \cos \omega t \end{cases} \\ \therefore & \begin{cases} y_A = r(1 + \cos \omega t) \\ y_B = r(1 - \cos \omega t) \end{cases} \\ \therefore & \begin{cases} U_A = mgy_A = mgr(1 + \cos \omega t) \\ U_B = mgy_B = mgr(1 - \cos \omega t) \end{cases} \\ \therefore & \underline{U_A + U_B = 2mgr} \end{aligned}$$



また, U_A の時間変化は右図。

II

問1 陽イオンが磁場領域に進入した瞬間に、ローレンツ力が図の下向きにはたらく必要があるので、
磁場は紙面の裏から表に向かう向き。

問2 加速時のエネルギー保存則より

$$\frac{1}{2}Mv^2 = qV$$

$$\therefore v = \sqrt{\frac{2qV}{M}}$$

問3 半径を r として、円運動の運動方程式は

$$M\frac{v^2}{r} = qvB$$

$$\therefore r = \frac{Mv}{qB} \left(= \frac{1}{B} \sqrt{\frac{2MV}{q}} \right)$$

問4 検出器 D に到達する円運動の半径は問3の r に等しいので

$$\frac{1}{B'} \sqrt{\frac{2M'V}{q}} = \frac{1}{B} \sqrt{\frac{2MV}{q}}$$

$$\therefore \frac{M'}{M} = \left(\frac{B'}{B} \right)^2$$

問5 問4の質量比より、測定可能な質量数は磁束密度の2乗に比例し、磁束密度の大きさが最小の場合の質量数 50 が下限である。また、磁束密度の大きさが最大の場合の質量数

$$\left(\frac{0.200}{0.100} \right)^2 \cdot 50 = \underline{\underline{200}}$$

が上限である。また、磁束密度の大きさが 0.200 T と 0.199 T のときに検出される陽イオンの質量数の差 (整数) は

$$\left(\frac{0.200}{0.100} \right)^2 \cdot 50 - \left(\frac{0.199}{0.100} \right)^2 \cdot 50 = (2.00 + 1.99)(2.00 - 1.99) \cdot 50$$

$$= 3.99 \cdot \frac{1}{100} \cdot 50 = 1.995 \approx \underline{\underline{2}}$$

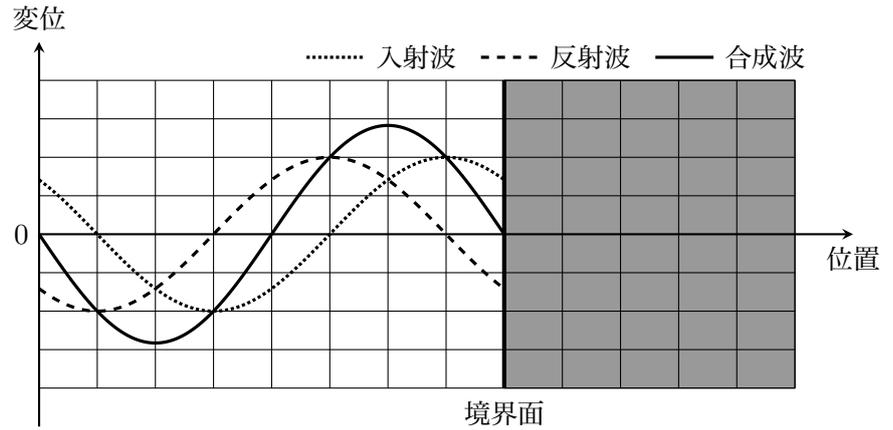
III

問1 右図。

問2 求める薄膜中の波長を λ' として屈折の法則より

$$1.0\lambda = n_1\lambda'$$

$$\therefore \lambda' = \frac{\lambda}{n_1}$$



問3 どちらの反射も位相が π 変化するので、弱め合いの条件は

$$2d = k\lambda' + \frac{\lambda'}{2}$$

$$\therefore 2d = \left(k + \frac{1}{2}\right) \frac{\lambda}{n_1} \quad (k = 0, 1, 2, \dots)$$

問4 図3のグラフの最小値を示す波長であり、 $5.2 \times 10^{-7} \text{ m}$

問5 両隣の強め合いにも注目して、光路差は共通であるから

$$n_1 \cdot 2d = (k + 1) \cdot 4.32 \times 10^{-7} = \left(k + \frac{1}{2}\right) \cdot 5.2 \times 10^{-7} = k \cdot 6.50 \times 10^{-7}$$

$$\frac{k + 1}{k} = \frac{6.50}{4.32} \approx 1.5 = \frac{3}{2}$$

$$\therefore k = 2$$

問6 問5の立式より

$$d = \frac{k \cdot 6.50 \times 10^{-7}}{2n_1}$$

$$= \frac{2 \cdot 6.50 \times 10^{-7}}{2 \cdot 1.7} \approx 3.8 \times 10^{-7} \text{ m}$$